

岡 秀治

## 【平成21年8月18日】

司会：消化器内科 齊藤 裕樹  
 症例担当：一年次研修医 岡 秀治  
 病理担当：旭川医科大学病理学講座 免疫病理分  
 野 佐藤 啓介

症例：59歳，男性  
 主訴：腹部膨満感  
 既往歴：尿管結石（39歳時），高脂血症（45歳時より），足踵良性腫瘍（52歳時）  
 居住歴：木造家屋  
 職業：精神介護職員  
 現病歴：高脂血症にて当科外来通院中。5日前からの腹部膨満感を主訴に，平成21年5月下旬当科受診。CT上，多量の腹水が認められた（図1）。上部消化管内視鏡検査，腹部超音波検査を施行するも腹水貯留の原因となるような病変を認めなかった。その後も，短期間での急速な腹水の増量が認められたため，精査加療目的に受診後4日目で当科入院となった。

入院後経過：入院当日，腹部膨満感の増悪を認めたため，腹水穿刺を施行した。自覚症状は穿刺後数時間はやや改善したものの，翌朝には元の状態に戻っていた。腹水細胞診では，ヒアルロン酸189,000 ng/mlと異常高値を認め，遊離中皮細胞が多数認められたことから腹膜悪性中皮腫の疑いが強いと考えられた。その後も腹水穿刺を数回施行し，血液製剤，利尿剤を含めた治療を行ったものの，腹部症状は悪化の一途を辿り，腎機能も急速に悪化した。第六病日，状態が急速に悪化し，同日午後永眠された。

病理解剖学的診断：剖検番号 S50

## 【主病変】

1. 腹膜悪性中皮腫（腸間膜原発）  
 腹腔内播種性転移

## 【副病変】

1. 両肺うっ血（左：690 g，右：610 g）
2. 肺動脈塞栓
3. 良性腎硬化症

## 【推定死因】

悪性中皮腫の腹腔内転移・浸潤による循環不全（腫瘍死）

所見：悪性中皮腫は，腹腔内で播種性に転移し，大小の結節をびまん性に形成していた（図2，3）。実質臓器への浸潤は認めなかった。腫瘍細胞は，特定の構造を示さない紡錘形の肉腫様成分と細胞質豊富で，decidual cellに類似した上皮様成分の混在する二層型中皮腫で，細胞間の間質も浮腫性であった（図4）。

免疫学的染色ではCalretinin，D2-40，Vimentin，CAM5.2，AE1/AE3が陽性であり，中皮腫細胞として矛盾しなかった（図5，6，7）。

以上のことから腹膜悪性中皮腫と考えられた。肺，腸管を含め，アスベスト小体は組織学的に認めず，病歴からもアスベスト曝露歴は認められないため，本症例とアスベストとの因果関係は明らかではなかった。

考察：諸家の報告では，予後不良なタイプとしてびまん性，肉腫型が挙げられているが，本症例ではびまん性，二相型であった。びまん性，二相型はMST約10か月と報告されているものの，本症例は約二週間と特に急速な経過を辿った。これまでの報告では診断から一か月未満の急速な経過を辿った症例は二例存在するのみであった。

おわりに：急速な転帰を辿った腹膜悪性中皮腫の一例を経験した。腹膜悪性中皮腫には早期診断が非常に重要であると考えられた。

図1：初診時CT 多量の腹水貯留を認める

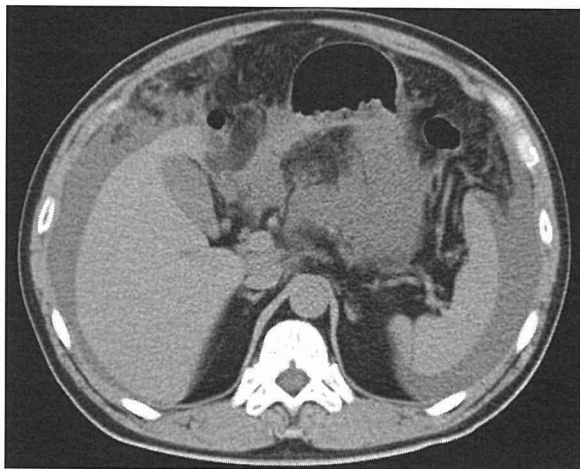


図2：病理標本① 中央に約10cm大の腫瘤を認める

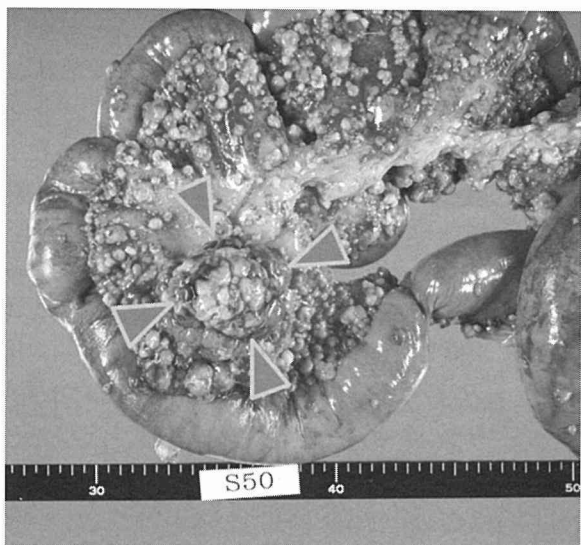


図3：病理標本② 小腸が白色～黄褐色、米粒大～空豆大の結節状腫瘤でびまん性に被覆されている

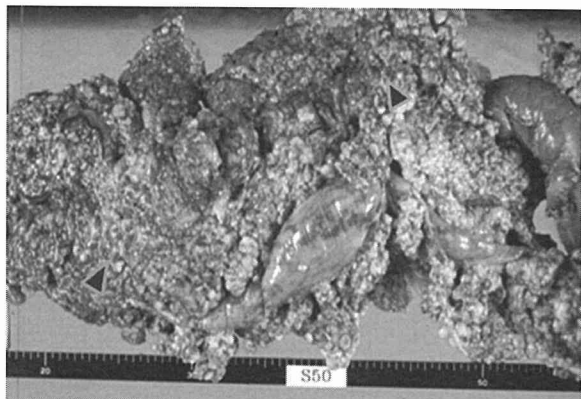


図4：HE染色(×100) 核、細胞は正常中皮細胞に類似し、他の上皮系、間葉系細胞の構造的特徴を示していない

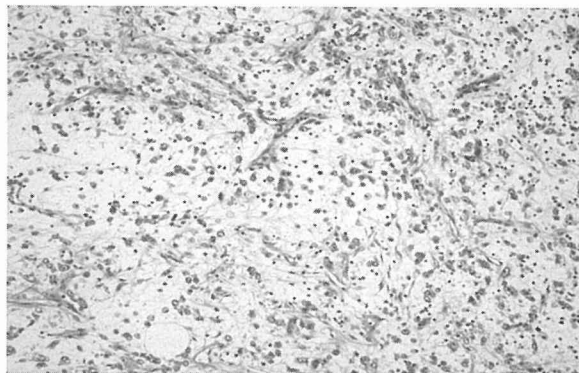


図5：Calretinin(×100) 紡錘形細胞で一部陽性

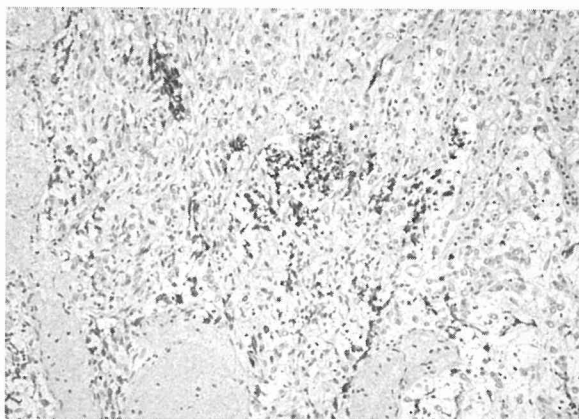


図6：D2-40 ほぼ全ての細胞で陽性

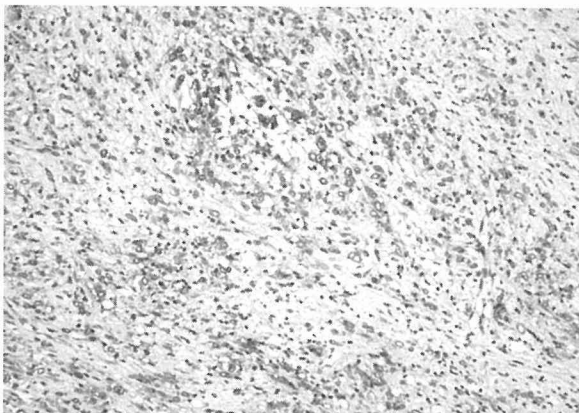


図7：AE1/AE3 紡錘形細胞で一部陽性

